様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２９日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００６　～　２００８
課題番号：１８５１０２１１
研究課題名（和文）　地方史から見る近現代中央アジア：地域構造の再検討

研究課題名（英文）　Local history of modern Central Asia: Regional identities and interactions

研究代表者
宇山　智彦（UYAMA TOMOHIKO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：４０２８１８５２

研究成果の概要：
中央アジアに関してはこれまで国単位の研究とコミュニティ・レベルの研究が主流であったが、本研究ではその中間である州レベルの史料を集め、分析した。中でも特色ある地域としてタジキスタン東部のパミールとカザフスタン西部の旧ボケイ・オルダに注目し、両地域における諸文化の交流や共存の様相を明らかにした。また、タジキスタン内戦やクルグズスタン革命において地方意識が持った多面的な意味を分析した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：地域研究、中央アジア史
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：中央アジア、地方史、近現代史

１．研究開始当初の背景

ロシア帝国期の中央アジアの行政区分は現在とはかなり異なるものであった。ソ連時代には民族共和国が設定されたものの、経済・社会生活においては共和国境の実質的意味は小さかった。にもかかわらず歴史記述はほとんどが共和国単位でなされ、その傾向は各国の独立後ますます強まっている。欧米や日本では、イスラーム研究の文脈での地方史や、村やマハッラなどコミュニティ・レベルでの研究が現れているが、州などの中間的な単位での研究は少ない。本研究はその欠落を埋めようという問題意識から着想された。

２．研究の目的

旧ロシア帝国・ソ連領中央アジアの近現代史および現状を、地方に立脚した視点から再構成することを目的とした。時間軸の上では、(1)ロシア帝政期の地方統治、(2)ロシア革命期自治運動の地域的展開、(3)ソ連期の民族共和国の中での地方の位置づけ、(4)独立後の各国における政治変動の中での地方意識の現われ、という論点を設定し、それぞれについて特徴的な事例を分析することとした。全体として、歴史学・政治学の国単位のマクロ研究と、人類学の村・町単位でのミクロ研究をつなぐ、新しい中央アジア研究の手法を編み出すこと

を目指した。

３．研究の方法

本研究では、一般の流通ルートで入手できる文献の収集もさることながら、現地調査が極めて重要な意味を持った。現地調査では以下の作業を行った。

(1) 各地域の歴史研究者からの聞き取りおよび史料の入手。

(2) 現代史に関しては、政治家、行政官、研究者、ジャーナリスト、元野戦司令官らからの聞き取り。

(3) 図書館に所蔵されている地方史関連文献の閲覧。

(4) 地方の文書館での史料調査（カザフスタンのアクトベ州国立文書館で実施）。

４．研究成果

本研究では、中央アジアの地方史について幅広く文献・情報を集めるとともに、以下のようにいくつかの特徴的な地域・時代を選んで事例研究を行った。

(1) ロシア帝国期の西カザフスタンは、中央アジアの中で最も早くからロシアの影響下に入った地域であると同時に、乾燥した風土のためロシア人の入植はあまり進まず、むしろタタール人やバシキール人との交流が深い地域であった。しかしこの地域を単にカザフ草原の一部としてみる傾向のあった同時代のロシア人による研究においても、民族共和国が歴史記述の枠組みとして定着したソ連時代以降のカザフ人による研究においても、西カザフスタンの歴史はカザフ民族史の枠に押し込められがちであった。本研究では、西カザフスタン、特に最西部の旧ボケイ・オルダ地域での文化交流の歴史を分析し、19 世紀前半にハンたちがロシアやタタールの影響を受けながら築いた教育・文化伝統が、ソ連時代初期に至るまでこの辺境の地で生き続けたことを明らかにした。また、本研究代表者と類似の関心を持つ現地の研究者（アクトベのグルミラ・スルタンガリエヴァ教授、ウラリスクのムラト・スドゥコフ教授など）との協力関係を確立した。

(2) タジキスタンの東部・南部地域の近代史を分析した。この地域は、ロシアとイギリスの「グレート・ゲーム」や、ロシアの保護国であったブハラ・アミール国の領土拡大とそれに対する地元の反発など、さまざまな要因が絡み合って帰属・国境が複雑に変化したため、その過程を整理した。また、この地域は秘境であるがゆえ帝政期・ソ連時代初期の多くの研究者の関心を引きつけ、文系・理系にまたがる地理学・民族学調査がなされたが、これをロシア帝国における辺境に関する知の蓄積過程の例として分析するとともに、内容的には特にパミールのイスマーイール派がどのようにして独自の宗教・文化伝統を保ったかに注目した。また、パミールに在住する歴史家で多くの史料を所有するシェルゾドショエフ氏と出会い、ペルシア語史料を専門とする日本人研究者たちに彼を紹介して、これらの新史料に関する共同研究の道を開いた。

(3) 本研究代表者が以前からの専門としているロシア革命･内戦期のカザフ民族運動史（特にアラシュ･オルダ自治政府をめぐる諸問題）を、地方史の観点から再検討した。当時のカザフ人の大多数は草原地帯に住み、都市は草原の縁辺に位置して都市間の交通も不便だったため、民族運動の中心拠点が存在しなかった。時には運動の性格の地方的な違いや、運動の大会開催場所をめぐる駆け引きも生じた。しかし、一部の先行研究が示唆するような、アラシュ・オルダにおける東部と西部の部族的・地方主義的対立は史料からは確認できない。内戦期の混乱した状況の中で拠点を分けることには一定の合理性があった。むしろ地理的要因は、西部ならウラル・コサック、東部ならシベリア自治政府やコルチャーク政府という同盟相手の選択に大きく影響している。運動全体としてはカザフ人諸地域の統一への志向が強く、この志向をソ連時代初期の政治家たちが引き継ぎ、共和国境確定の際にいくつかの地域のロシア本土への移管を防ぎ得たことは、現在のカザフスタンの領土一体性保持にもつながっている。

(4) ソ連における民族史と地方史の関係については、本研究代表者が以前取り組んだ、ソ連における民族史言説形成過程の研究（「旧ソ連ムスリム地域における「民族史」の創造：その特殊性・近代性・普遍性」酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、2005 年所収、など）を補足する作業が中心となった。ソ連時代初期の「カザフスタン研究協会」や「タジキスタンおよびイラン系諸民族研究協会」では、民族共和国を研究の基本枠組みとしながらも、共和国を超えた事象の研究や地方研究にも関心を向けていた。しかし 1930 年代以降地方研究の方向性は、埋蔵資源の発見などソ連の国益に直接奉仕することと、学校の教科への取り込みによりアマチュアの歴史知識を高めることに限定され、専門的な歴史研究・人文社会科学研究からは離れていった。

(5) 現代中央アジアにとって重要な事件であるタジキスタン内戦（1992～97 年）とクルグズスタン革命（2005 年）における地方ファクターを研究した。タジキスタン内戦は「地域間の戦争」とも呼ばれ、地方意識が政治的

対立･紛争を招いた例としてよく挙げられる。内戦の開始の際に地方意識や地方単位での動員が大きな役割を果たしたこと、地方派閥が現在の政治においても少なからぬ意味を持っていることは現地調査・文献調査で確認できたが、同時に、内戦の展開および終結と地方意識の関係は複雑であることが分かった。つまり、武装勢力があちこちの地域を動き回って脅威を与えたことにより､各地域の政府側･反政府側勢力の間に、自分たちの地方の安全を守るためには互いに協力することが必要だという認識が生まれ、時に和平に消極的だった政府側・反政府側指導者レベルでの和解を後押ししたのである。内戦終了後にも、こうした協力の経験が想起されることが、かつて 2 陣営に分かれて戦った人々の共存に役立っている。

クルグズスタン革命については、北部出身者を中心とする政権が長い間続いていたことに対し、次は自分たちの地域の出身者を大統領にしようという南部の人々の意識が底流にあったことが指摘できる。しかし、政変の引き金を引いたのは、北部でも各政治家が個別の利益を追求し、アカエフ大統領を守ろうという動きが広まらなかったという事情であり、単純な南北対立の図式は当てはまらない。地方間の対立というよりは、各選挙区内での対立が中央での対立と連動したことが政変の原動力となったのである。

地方研究の宿命として、扱う事象の個別性が高く、容易に一般化することのできない問題が多いが、事例研究から言えることを大まかに概括するなら、以下のようになろう。

① 従来民族や共和国の枠組で語られてきた中央アジア近現代史を、ボケイ・オルダやパミールのように、辺境ではあるが独自の文化伝統・文化交流史を持つ地域に着目することによって、より多面的に分析することができることを示した。

② ただし、民族を単位として歴史を語る傾向や、さまざまな行政単位に分断されていた地域を民族的な枠組みで統一しようという志向はロシア帝国期・革命期から存在した。そのような全体的趨勢と地方的な多様性との連関に注目する必要がある。

③ ソ連時代に、民族や共和国を枠組みとする歴史記述のスタイルが定着した。これは現在まで引き継がれており、地方ごとの多様性や国境を越える事象・現象に対する学問的関心は低いが、近年これらの点に注目する研究者が徐々に増えており、国際的共同研究の進展が期待される。

④ 現代政治の分析においては、地方主義や地域閥の問題が過度に強調される傾向があるが、実際には地方レベルの対立・協調と中央での対立・協調が複雑に絡み合っており、よりきめ細かい分析が必要である。

中央アジアの地方史は研究の未発達な分野であり、本研究でも一つにまとまった体系的成果が得られたわけではないが、さまざまなテーマについて発展可能性のある研究の種を芽吹かせることができたと考えている。本研究代表者が今後行う比較帝国史の共同研究の中では特に、帝国の統治構造・文化や帝国的世界秩序の中で小地域が果たす役割について考察を進めたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 宇山智彦「中央アジアとコーカサス：近くて遠い隣人？」前田弘毅編『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』北海道大学出版会、2009 年、31～58 頁（査読無・依頼原稿）。

② Uyama Tomohiko, “Historiography of Local and Regional Studies in Western Kazakhstan: An Alternative to National History?” *Central Eurasian Studies Review* 7, no. 2 (2008), pp. 16–22.（査読無・依頼原稿）

③ 宇山智彦「アブハジア・南オセチア：小さな地域の大きな紛争」『世界』2008 年 11 月号、54～61 頁（査読無・依頼原稿）。

④ 宇山智彦「研究案内：中央アジア・ロシアのイスラーム」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、2008 年、398～402 頁（査読無・依頼原稿）。

⑤ 宇山智彦「カザフの民族主義（20 世紀初頭）」歴史学研究会編『世界史史料 第 9 巻 帝国主義と各地の抵抗 II 東アジア・内陸アジア・東南アジア・オセアニア』岩波書店、2008 年、248～249 頁（査読無・依頼原稿）。

⑥ グルミラ・スルタンガリエヴァ（宇山智彦訳）「南ウラルと西カザフスタンのテュルク系諸民族に対するロシア帝国の政策の同時性（18-19 世紀前半）」『ロシア史研究』82 号、2008 年、61～77 頁。（査読有）。

⑦ 宇山智彦「2006 年の歴史学界 回顧と展望：内陸アジア 2」『史学雑誌』116 編 5 号、2007 年、263～269 頁（査読無・依頼原稿）。

⑧ 宇山智彦「第一次世界大戦期ロシアの「異族人」の動員（1916 年）」「全ロシア・ムスリム大会の決議（1917 年 5 月）」「ソヴェト・ロシアとイスラーム（1920 年代）」「カザフ人の強制定住化（1930 年代前半）」歴史学研究会編『世界史史料 第 10 巻 20 世紀の世界 I ふたつの世界大戦』岩波書店、2006 年、36

～38、51～53、122～124、292～294 頁（査読無・依頼原稿）。
⑨ 宇山智彦「クルグズスタンの「革命」とカザフスタンの「安定」：15 年の政治・社会変動の結果を分けたのは何か」『ユーラシア研究』35 号、2006 年、3～8 頁（査読無・依頼原稿）。
⑩ 宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の革命：エリートの離合集散と社会ネットワークの動員」『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン』北海道大学スラブ研究センター、2006 年、41～77 頁（査読無）。
⑪ 宇山智彦、前田弘毅、藤森信吉「グルジア・ウクライナ・クルグズスタン三国「革命」の比較」『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン』北海道大学スラブ研究センター、2006 年、79～85 頁（査読無）。
⑫ 宇山智彦「「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策：正教化と兵役の問題を中心に」『スラヴ研究』53 号、2006 年、27～59 頁（査読有）。

〔学会発表〕（計　9 件）
① Uyama Tomohiko, "The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: From the Bokey Horde to Abkhazia" // International Seminar "Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives," 4 February 2009, Kolkata.
② Uyama Tomohiko, "A Note on the History of *Jut* in Kazakhstan: Climatic Factors in Massive Loss of Livestock" // International workshop "Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future," 2 February 2009, Kyoto.
③ Uyama Tomohiko, "Historiography of Local and Regional Studies in Western Kazakhstan: An Alternative to National History?" // Central Eurasian Studies Society, Ninth Annual Conference, 20 September 2008, Washington, DC.
④ Уяма Томохико, «Взгляды казахской интеллигенции на суд биев, русский суд и шариат (конец XIX—начало XX вв.)» //Международная научная конференция «Казахский суд биев — уникальная судебная система», 22 мая 2008 г., Алматы.
⑤ 宇山智彦「小国の強さ：「帝国」的世界秩序の中の中央アジア」中央ユーラシア調査会シンポジウム「中央アジアと東アジア協力の展望」、2008 年 2 月 4 日、東京。
⑥ 宇山智彦「帝国の弱さ：ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序」21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ・ユーラシア学の幕開け」2008 年 1 月 24 日、東京。
⑦ Uyama Tomohiko, "Reconsidering the Interactions between the Tsarist Administration and Central Eurasian Intellectuals: Is the Orientalism Theory Viable?" // International Conference "Central Asian Studies: History, Politics and Society," 15 December 2007, Tsukuba.
⑧ Uyama Tomohiko, "The Alash Orda between Siberia, the Urals, and Turkistan: Imperial Legacy Surrounding the Kazakh National Movement" // International Symposium "Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts," 7 December 2007, Sapporo.
⑨ Uyama Tomohiko, "Was There an Islamic Alternative? The Place of Islam in the Kazakh National Movement at the Beginning of the Twentieth Century" // International Conference on Islamic Civilization in Central Asia, 5 September 2007, Astana.

〔図書〕（計　3 件）
① 宇山智彦編、北海道大学スラブ研究センター監修『地域認識論：多民族空間の構造と表象（講座スラブ・ユーラシア学第 2 巻）』講談社、2008 年、全 322 頁。（執筆章：「序章 地域認識の方法：オリエンタリズム論を超えて」11～36 頁）
② Uyama Tomohiko, ed., *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia* (Sapporo: Slavic Research Center, 2007), ix + 376 p.（執筆章："A Particularist Empire: The Russian Policies of Christianization and Military Conscription in Central Asia," pp. 23–63）
③ カトリーヌ・プジョル（宇山智彦、須田将訳）『カザフスタン（文庫クセジュ 904）』白水社、2006 年、全 180 + iii 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
宇山　智彦（UYAMA TOMOHIKO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：４０２８１８５２

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし